



御高種彦公御隨筆  
用檢第

天

1106

15  
1435  
1





附言

○かゝるたる草紙の類名を記す事と既小序も其意にて  
 云々紙書肆見て笑て曰翁の草雙紙の作救種阿修中であつて  
 人小名を知りて説のよあいのをも名ありてと見る人もあつた  
 名をくつて誰れをいふと此の理あれ言房の意もまうせり  
 ○おのれおれと物知りの友人の和漢の學者多くあり是ふかこらひ  
 あり砂も玉の光りを添へてされと益るき書小他を勞せんも心るは  
 似てといひ誤りも誤りのまゝ不文の不文のまゝの我一カも門人  
 たふ校正を申すこと

○割刷のつらさうかりん紙思ひ條の茶簾の産小略せる類阿修あり  
 又六のとける小是の字紙当されが義のふどり雜きところ阿れと通用  
 して此小作るると婦女子は讀むことなまめんりある事

用捨箱 上首ノ章

用捨箱目録

上之卷

- |    |   |    |   |
|----|---|----|---|
| 一  | 草紙の讀初 <small>さうじのよみはじめ</small>  | 二  | ちいらやの童謡 <small>ちいらやのどうたう</small> 初下ウラ                                   |
| 三  | 餅屋の看板 <small>もちやのくんばん</small> 二下ウラ  | 四  | 後暗觀立 <small>あきあきかんたて</small> 六丁オモテ                                      |
| 五  | 鍋取杓子の古製 <small>なべとりすく子のこせい</small> 七オ                                       | 六  | 六郷酒匂之土橋 <small>むくろしうのうぢのつちはし</small> 八ウ                                 |
| 七  | 昔之祭禮 <small>むかしのみまつり</small> 九ウ   | 八  | 粥の木折 <small>かゆぎのきをり</small> 燈籠 <small>とうろう</small> 十ウ                   |
| 九  | 御事 <small>ごご</small> 始 <small>はじめ</small> 十ウ 追考下廿八ウ                         | 十  | 伊豆山 <small>いづのやま</small> 酒椰 <small>しゆや</small> の葉 <small>のゑ</small> 十四ウ |
| 十一 | 六方詞 <small>ろくほうし</small> 十五ウ  | 十一 | 春秋の繪 <small>しゆんしゆのゑ</small> 檀 <small>たん</small> 廿ウ                      |
| 十三 | 捨 <small>すて</small> ぬゑるとりの曲 <small>まがらひのまがらひ</small> 子 <small>こ</small> 廿三ウ | 十四 | 米饅頭 <small>こめまんぢう</small> 乃名義 <small>のなぎ</small> 廿四ウ                    |

中之卷

- 一 候そと庭にくみ
- 二 在家いかにの高たか燈とう籠籠ニニ
- 三 禿かぶらのあやうぶ昔むかし蒲よもぎうちち三才
- 四 紙帳かみぢやう賣う。紙子かみこ賣う 四四才
- 五 金銀きんぎんときぬら伽羅維きやらゐといんごのひご隠語おんご 五五才
- 六 荷にいふ風ふう呂りよ 七七才
- 七 椿つばき頬ほ燕えん脂じ 七七才
- 八 涙なみだ法師はふし。多おほ法師はふし 九九才 追考下廿九才
- 九 掃地坊さうぢやう 一一才
- 十 さらめんぢ坊ぢやう 十十才
- 十一 やんぢやぢ坊ぢやう 十十才
- 十二 さられんぢ坊ぢやう 十十才
- 十三 七色しちしき賣う 十三十三才
- 十四 誰たれ袖そで。花はな袋ぶくろ 十七十七才
- 十五 土手どて節ぶし。加賀かが節ぶし 十九十九才
- 十六 質屋あぢやのく看かん版ばん 廿二廿二才

用捨箱 上首二

- 十七 鎮ちん銚ぢやう屋やのきんぎよ金魚きんぎよ 廿三廿三才
- 十八 物もの賞しょう美みてきやら伽羅維きやらゐといんごのひご隠語おんご 廿四廿四才
- 十九 師し走そう坊ぶちやう主ぢゆう 廿五廿五才

下之卷

- 一 くらとのいも海うみ 芋いものやま山やま
- 二 淨じやう瑠る璃り本ほん刊かん行ぎやうのし始はじめ 初はつ丁ぢやう才
- 三 奥おく淨じやう瑠る璃り 五五才
- 四 蚊帳かむぢやう小せう香かう袋ぶくろをく掛か 七七才
- 五 枕まくら簟せん笥こし 八八才
- 六 夢むさ想さう枕まくら 夢むさ想さう流りゆうのかみ髮かみ 九九才
- 七 瀧たき井い山さん三さん郎らう 十十才
- 八 八人はつにん座ざ頭だう 十三十三才
- 九 錢ぜに獨どく樂らくのりやうぎやう流行りやうぎやう 十四十四才
- 十 俳諧はいがいのく句くときやう狂歌きやうかとあやま誤あやまるる 十六十六才
- 十一 下あご帶おびとて手て細こといのひ俗語ぶくご 十九十九才
- 十二 別べつ當たうといのひ俗語ぶくご 二十二十才

- 十三 太郎次郎 廿一才
- 十四 天が紅 尼が經粉 廿三才
- 十五 温飢屋の看板 廿四ウ  
半川
- 十六 大女房阿与米 附甫春  
廿六才
- 十七 袖頭巾 廿七ウ
- 十八 追考二條 廿八ウ

通計五十一條目錄畢

用捨箱上首三

用捨箱上之卷

柳亭種彦編

一 草紙の讀初

昔の正月吉書の次小冊子の讀初と女子の文正草紙と讀一とあり今もこの大  
 家小の古例残りあり此と今多く傳り大木小本摺板の救あるも昔を家と小  
 るてあるとや一冊子なりしが故より標題よむの草紙と書るは是の証あり  
 と古卷の記小へてり梅る此説もあらん歟 俳諧のなり鶴といふ集小  
 書初小 文章の文よやれ姫小松 女 〇草の正の假字  
 あり是宝永元年の印本なり當時まで彼草紙の讀初といふ事のあり一故向  
 解あり初春の季を持しるん。さて此草紙もこのまゝ事ハ淨瑠璃の作りたるハ  
 去儀掾正勝かかたり小歌ゆつりたるハ松の巻巻垂小載るやとも知らる踊り等の安宅小

常陸園のついで小金の花が咲くと何れも又正の事也角屋天正の古写本小角今筑前園  
柳川を多穂つ歌ふくると何れ此草紙廢れてその歌も絶却て遠園小残り  
るべし此一條殊小與多き話るれども草紙の讀初とのふ因て初小記しつ

二 ちのちやこのちの童謡

前小記し踊るお安宅の近き物るる古き小歌と傳りしれ故解が事多し  
其のちよ。ちのちやこのちやかつこの舞事とのいられ遊びるるこの童謡を標や辛夷や  
桂の葉とらふを歌ひ誤りしりさるまの忠度巢林子著小須磨の海士の物語の  
茶小「秋もろろの野分の風おあちやこがーやかつこの舞柳まぐさ小ちりく  
とくと」又信田小右郎作者不知「そまのいぶと目とふたのであやそまのいぶと目とふたのであや  
なまふまぐらぬ者い。あちやこがーやかつこの舞。さうやからーかごま。足のたあし  
りくく走り以上二種の舞踊あり又写本吉原つく草室永年小彼花街を大層とるる客肩車

用捨箱上一

我の知らざる事と誇ると思ふ揚屋の男の答詞ををさるるきより能くわのい  
傳れど譯知らぬ事ゆりかくれんをうふまぐらぬ者いちのちや子持やかつこの舞と  
ヤス事いする意お傳らんとヤシなり大層なことつまめて是の子どもの事るれが  
ひふしつとまごころをいれける」と何れ百年の昔江戸にも此童謡ありし事明る  
京近き田舎おの今も歌ふと云々屋島八景とのふ踊りあやも又あり

空礫 慶安二年 印本

自句又崑山 集人作者 各々編

季吟廿會集 寛文十二年ノ卷

海のまりて遊ぶ桂の里子 供 宗英  
かくもらんまうふまぐらぬるー 季吟

俳枕 寛文年間幽山撰 延宝八年刻

丹波 茂さたりかくれんをうふ桂山 不恐





此看板を写しとて  
 一日借らんとしりか  
 ぬりまゝと主人曰  
 是ハ四百年小迫き  
 古物少く実小神  
 有り故に少時  
 中も他に移せ  
 必災あり津の  
 困住吉の造営の  
 刻い多ふより  
 宮木と出さか  
 例るりその材  
 木と肩し馬

馬の高サを尺三寸

前後足のる  
 五尺一寸五分

用捨箱上三



我家の馬を  
 食さうらひ  
 け本馬の茶ハ  
 あり動  
 そ  
 奇特  
 をせ  
 まのらせう  
 るかこりし  
 尺世柳小すあ  
 ま中を写し  
 とせ

右の足  
 一寸半  
 まむ

將其馬の文字見つけが  
 若角行中これ由雲雀との謎  
 ありハ雲の跡をかよ  
 くのいふあれは駒ハ  
 つるぐまの意歟





上は換一々の近く宝曆の頃刊行なり  
 お伽草子一々の草紙小文えさる圖を  
 囲こり 角力より 筆記りるどりの筆を  
 あつめちりて一々の草紙を 印取ら  
 江戸小のふさひさるるべし  
 如比馬小假面をかぶらせし 看板今小羅波  
 小阿りと空一が其所を忘さし是則心  
 祓橋の餘屋袂は画我衣小縁先小本馬  
 を出さしとある小合を馬小面を知らせ  
 する馬の息の餘小かるがゆゑ福面を  
 掛しとら洒落らんと或人々の我衣  
 小元祿の頃やとあるとある誤り宝曆  
 年間きを駒込追分の餘屋の公本馬  
 の看板ありとと毛

用捨箱上四

是も又古老の話小本馬ハ真粉馬の看板より昔ハ真粉馬館の鳥一對の物  
 るり一々今館のものはありて真粉馬の絶すと此説より再案する

毛吹草 寛永十五年重頼撰  
 原板正保二年刻

あんど馬小今やひくらんを月夜 弘永

埋草 寛文元年成安撰  
 同三年刻

あらの寶の喉を鞍袂けあんど馬 木王 後の宝由  
 菓子のはん

後大矢救 延宝八年吟  
 同九年刻

あづまの方へ鞍をの馬 西鶴  
 遠坂のあんどこの形跡もあー 全

みどりの此不りの俳書おも見えしれどさるる略つ西鶴の句小古老の話と合せ  
 考れあんど馬の看板よりとい説も捨る。又古より白糸餅といあり細く縁のり

方物や馬の形うまあわづされど異名いみなと瘦馬やせうまとの見みはあんなる小対こたいしての名なるべし

花紋日きんぎょ 享保十四年印本

白糸しろいと 揚枝やうじのむちや峠茶屋とうげぢや 作者しやうしや 嗣し

如ごとひるを附つけし又信州小縣郡しんしゅうせうけんぐんの今の風俗ふうぶくと記きし冊子しやくし小涅槃會せつねんかいの目寺めじと  
あそんで餅もちの細こき物ものを作つくりし糸いと消しょうの人ひとあつたをせうませうまといふ事ことあり  
享保の頃ころもちや物もの江戸えどあるは故ゆゑは峠茶屋とうげぢやと句ことば作りし中なかあつた  
再また云い白糸しろいと餅もちを細こく秘ひぢりる物ものなりといひしその証しやう

徳元獨吟千句 寛永五年吟

秘ひぢりあひつても銭ぜにとやりこる  
まゝ糸いとと餅屋もちやの榎えのふ賣買うりかひして

續山の井つづきのい 季吟きぎん 寛文七年印本

用捨箱もちがたばこ 一五

秘ひ雪ゆきを白糸しろいとよまゝ柳やなぎの邪よこしま 宗房むねふさ 芭蕉翁ばしやう打名うちな

養生主論じやうじやうしゆん 天和三年印本 小糸こいとのきとあるも是これるる實じつの名なも此書こゝにえし

四よ 志しと暗くらい觀立くわんたて日ひ

昔むかしの常言じやうげん小葉師せうはし前まへ。地藏ぢぢやうの後のち。といふ事ことあり是これは暗くらき夜よの事ことなり。藥師やくしの湯ゆ  
日ひの八日やち七しちの茶ちやの七日しちまで。地藏ぢぢやうの湯ゆ日ひの廿四日にじふよっぴ七しちの後ののち廿五日にじふごよりなり。南華なんがをるし

貞享しんかう年ねん 小曰こいふ「昔八月十五夜むかしはつごしちごの頃ころ寺てらの上人のうじん同病どうびやうを連野れんやをたれを湯ゆ通とほりるさ  
しつ小此所こゝにそつとて日ひくらげ盗人たうじん出て人ひとをるやますしやススといふ此道こゝを  
湯ゆ通とほりるささとて上人のうじん曰いふ古ふるより藥師やくしの前まへ地藏ぢぢやうの後のちといふ程ほど今いま盗人たうじん出で  
ちどくさかほとあせらる同病どうびやう又曰またいふ。藥師やくしの前まへと地藏ぢぢやうのりるさといふ盗人たうじんの  
のみさきといふ上人のうじんひびき笑わらひいふ」といふ事ことあり上人のうじんが月つき夜よるる由よしも盗人たうじん出では  
といひし同病どうびやうのあつたといふ事ことなり又雄長老ゆうぢやうらうの「新撰狂歌集しんせんきやうかしゆ」 卷まきの「いさ寺てら小

地蔵院薬師院とていり地蔵院の女は好薬師院の若くは好花が門外外れを立て

此二院の名實は如何と云ふは其の趣向と云うけそれをいふと他りし

るべし是慶長元和の頃の狂おる暗き夜の事なりとい考へて用ゐられ此

諺と云ふは其の證ありと云ふは其の趣向と云うけそれをいふと他りし

同ト六観音の縁日と十八日とも配當して廿二日と云ふは七観音百六

暗いと轉トて解と云ふは是もあつた諺と云ふは其の趣向と云うけそれをいふと他りし

物の本小見えと云ふは東海道名所記万治元二の巻小茶屋の女あり茶と後むきて

とて侍りおはせと見れば如意輪観音と云ふは其の趣向と云うけそれをいふと他りし

えのとの樂阿弥がゆやうこれもいれあり二十之身の外小昔より尻くらひ観音

とてこれありと云ふは其の趣向と云うけそれをいふと他りし

一五一 鍋取。杓子之古製

鍋取なべとりの家と云ふは其の趣向と云うけそれをいふと他りし

取又と金かね取とりともいふは其の趣向と云うけそれをいふと他りし

形かたち作つくれり古製こせいの形かたちをなるは其の趣向と云うけそれをいふと他りし

ありた小撲こむく一画いっくわをなるは其の趣向と云うけそれをいふと他りし

月の条ちゆうのじょう御車ごぐるま新造しんぞう自東寺じとうじ御輿ごい御力ごりき者もの十三じゅうさん人にん牛飼うしう五ご人にん雜色ざしき九人くわにん車副ぐるまのふ金かね

取以下とりのしたと云ふは其の趣向と云うけそれをいふと他りし

又また大平記抄おほひらぎしやう五年ごねん著しよ廿四にじゅうよん卷まき巻まきの老懸らうけんの注ちゆう老懸らうけんとい下したの者ものの鍋取なべとりといふと云ふ

物ものと見みえんえん寛永十九年かんえいじゅうきゅうねんの或記あるき浅黄あさぎ指貫さしぬき冠かん鍋取なべとり持もち肩かた矢やあり

貞室さだむろのかごといふは其の趣向と云うけそれをいふと他りし

貞徳さだたけの句くもいふは其の趣向と云うけそれをいふと他りし

假名字例かりななづかひ延宝四年えんぼうしねん卯う小こ綾冠あやのかんむり具野俗あやのくさナベトリト云と

ゆり今と老懸を知りざる者かく厨の鍋取ハ足ざる人おろるべし

油くま 寛永二十年編云

公家と武家とふかふかのりらる

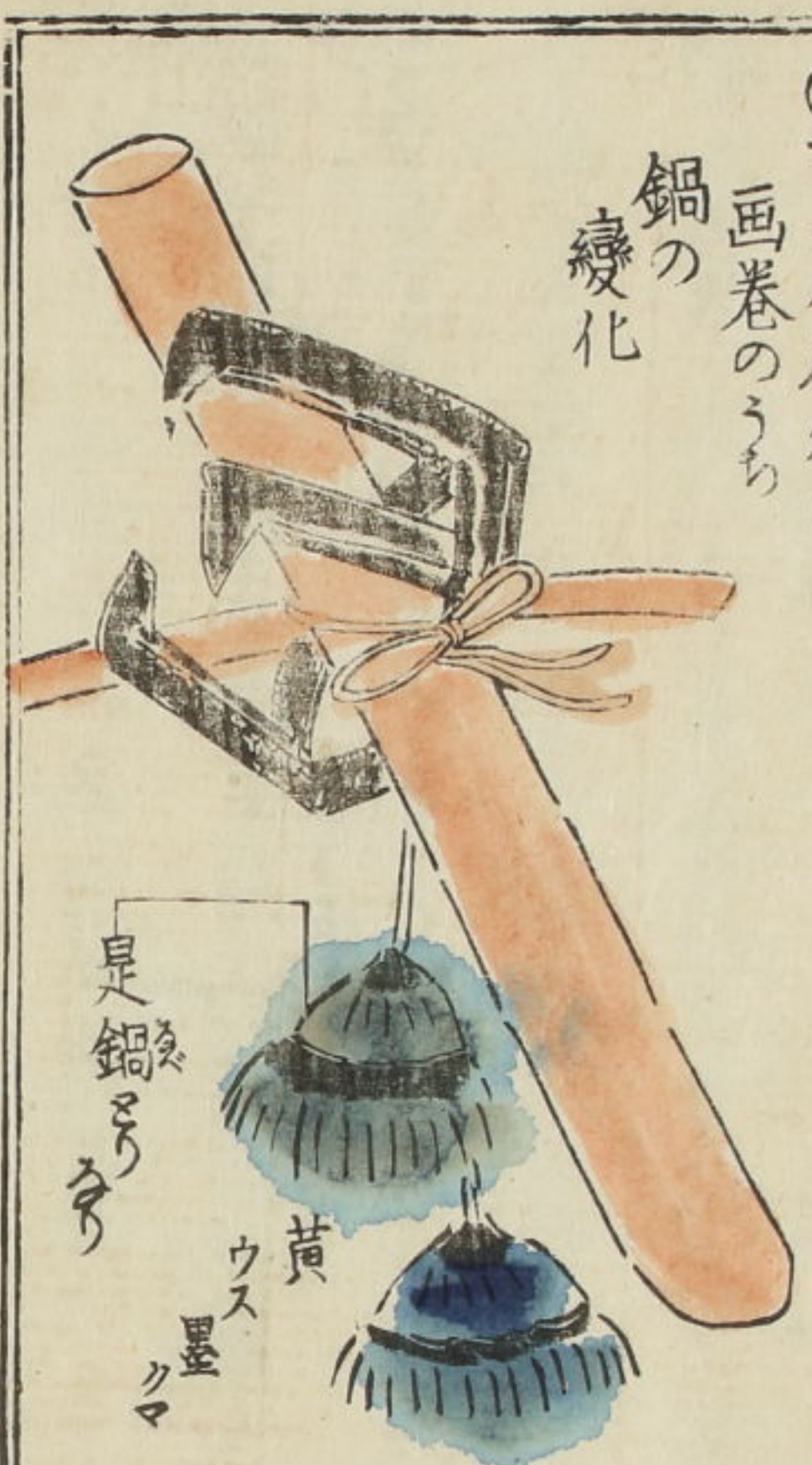
ふかふかかぶとのとふかふかふか 貞徳

前々不二頭とゆればかぶり物を二つ合。武家曹。老懸公家と附るなり

○百鬼夜行の

画巻のうち

鍋の  
變化



能譜二番鶏 元禄十五年印本 了我撰

前 下妻と八重小 打合春の風 一林

附 二枚さうら 柳へ溜反 了我

柳翁云

尾も柳を あらうけん 足さうらん

用捨箱と七

空林風葉 天和三年刻 自悦撰

鍋取飛でやうらく 豆踊る今宵の天

流辺



持子

上小録一う白く ありきつひのひ ありきつひのひ ありきつひのひ 形を蝶ももの 翼異小 天たさく 吟ん

此画の杓子の柄は曲れり安永の昔はさかのかくの如く「故に杓子定規の諺に  
あるるべし」此古製百余年前の江州又賀社より守り出され杓子の  
柄にありしとむがく「**たの草紙**」原板寛永十一年刻「まがまる物の品々の段」大工のかやの  
むぎ檜物屋の仕事。るべのつらふがややく」と並出せり。又俳諧も

玉海集 貞室撰 明暦三年印本

むがまるり ぬも 壽命 みるかかれ

むづよさハか多加杓子の荒けり 正式

るど見えしり 蝸蚪とむが杓子といふも 水中を尾のうぐとくをめぐり  
柄の曲せし杓子に似し故の名る事必せり 今のか多加杓子の常の杓子に  
らねば 蝸蚪も 似む 柄の定規もるべく 真直めて古製と失ひしり

〔六〕六郷。酒白。之土橋

用捨補 上入

六郷の橋絶て後土橋のかや 事のあり 酒白川も又同ト **千尋日本織**  
相洲佐川小橋ある事 霜月十日よりある 二月十日まであり 此日土橋  
しく歩行ししりまらるり」とあり 夏秋 水たけ 土橋とるる 故に  
を春のさるりあり 霜月とゆれども 十月より 掛し 事もゆきしとあり

五元集

神の旅 酒白の橋とるり 其角

とある句をえしり。さそく六郷の事 **誰袖の海** 宝永元年印本 六郷の渡り 爰も二月より  
九月頃までいふ橋ある」とあり 九月頃より二月までといふを書誤あり

筑波紀行橋の寶 享保五年

蜀黍や思ひのさけを葉よさくれ 五株  
六郷されてかさぎの橋 貞佐

六郷の橋はこれにて影の橋にかけりとあり。前もも記さ如く酒白も此所も  
秋の橋のまげれり。されば享保の頃までを春の去橋のかけり。秋又  
元禄十四年不角少紀行此の蠅六郷の祭此橋先年大水おちて今の長柄の  
橋の影がとまりぬ此渡りの船賃武家の外二文とあり去橋の掛りしる  
當時元禄の未だるれど標題も知りし如く五月の紀行るれが去橋のるまじり

七 昔の祭礼

系川小曰「日本所辺の祭礼は女中の衣類と借てまじり」との事あり。  
飛鳥川といふ書目種々あり是れ文化十二年の九十二歳の老人の筆記り逆養  
まれば享保八年の生るれが享保の未元文の頃と昔といふれしるるる

能譜太郎河享保十五年

前句 番屋島の已見え 秋 午寂

用舎菴二九

附句 小野照や君が袂に黒い腕全

附る二つめの秋るり小野照の宮下谷坂元。祭礼九月十九日る。君が袂に  
黒い腕と女の衣を借てまじりし事とひて祭礼とせ。秋季の句ふまじりるり。  
前の公符の筆記と見され此の祭礼とせ。祭礼とせ。祭礼とせ。秋の衣とせ  
り。後世の解し難きひまらるる。熟海から廿日の價をみる。足り  
再按出未秋京土産寛文四年作 延宝五年刻二の巻小「常盤君の古御所とてゆるへ此系野の古  
御所の事るり中二月十日の此色の祭るり安樂花といふ賀茂上野の村人らく  
の小袖素袍袴を借りし。さして刀を毎お打かひ。留太鼓鉦鼓るる。踊り  
めぐる犀の鋒あり。神脚幣とまじり。其拍子物の詞ふ。やまひ花よといふ。見物の  
人多くつとひ。借を小袖棘みかけるといふ。村民も腹さく。印地おな人  
多く損下けを今のまてかゝる危き事もる。云又 俳諧類船集梅盛著 延宝四年刻

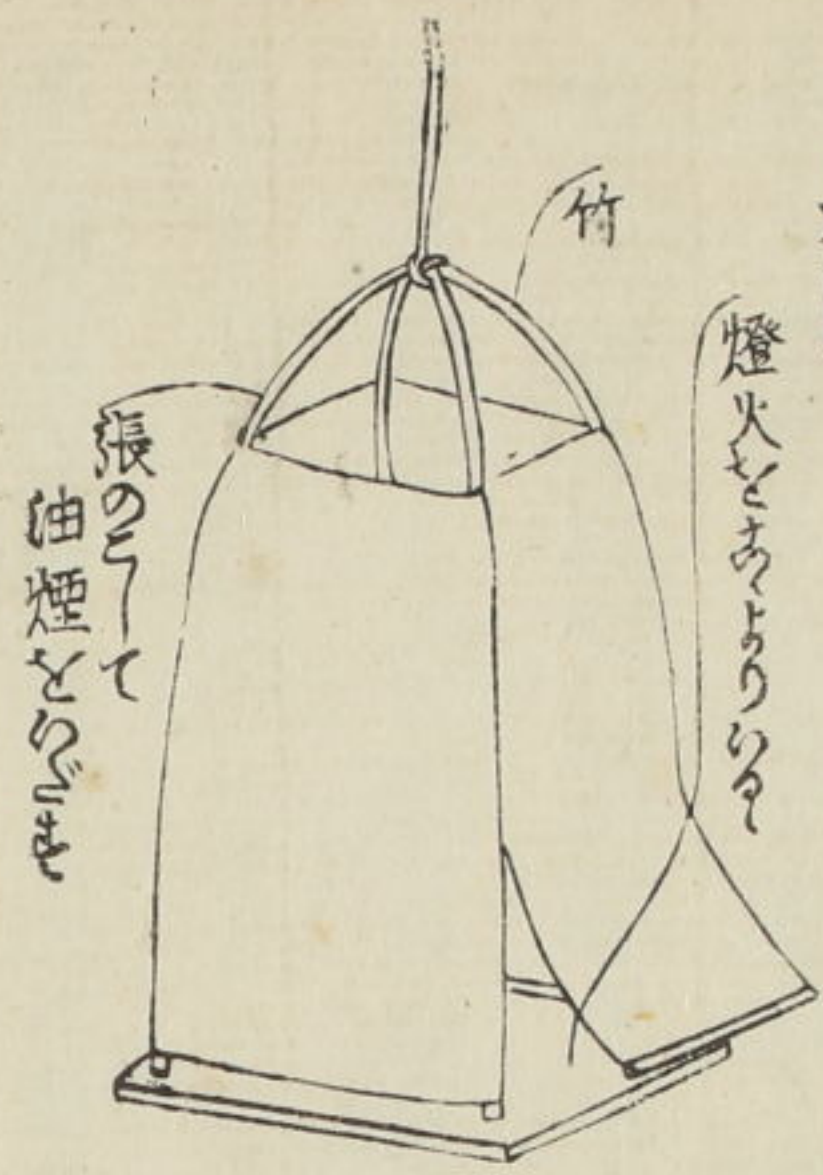


秋の日 袖さじヨリ抄出原本未見

色黒き下袴つまけかこもり 鼠蹊  
切袴折り付 凄き夕ぐれ 一井

此折り付燈籠享保中まで江戸中も何なり事ハ父の恩と証ととゞへ其画で  
大略の形を知るのころ近ガ友人某橋樹郡を尾提の地翁堂小教多掛ありを持  
来りて初て見たり彼所也ハ今も魂祭で不用ひそれを堂納りあるべし

其圖



竹箴を折りてその俵植ふるを折り付  
堀とのりハ燈籠も竹を折り付て洗居  
ゆきの名あり。賣物中へ行く家々中  
つらりとかきく竹を折りてあ  
るも何り又名の如く折り付てまき  
のりきあり一ハ小異るしと云

○右尾村と川崎より二里をり雀見の川上あり

用捨箱 上十一

ハ半葉の  
画も發句也

父の恩

此草紙享保十五年  
刊行人の知りあふ如く

三坪著  
沉詳の句ハ小島平七と  
ゆかぶきの追善あり

敷盛乃法卷の役めて世哉  
去て二十餘年  
折のやと扇のとりを 魂灯籠  
沉詳



英一蜂画





何ぞ今の俗に二月を事納十二月を事初とありしもあるり正月の式

ふかたりし事初めは二月が事初めなりとの証小録と

さて同事とるべくと記さんも見ゆふゆるさかへられ此日終と出ま由縁を引

書もかなく略きゆらくといふ一是の参州遠州の風俗の移りてを彼國にて

節分の日おとすと此日誤りの醒翁の考へられる七夕おとるべき牛馬を靈祭の棚

かく類より廿日より日終の鬼のおそるといひるを是は日終の底の角々の☆如

晴明九字或曰晴明之判といふ物るればるり原来の俗談唯古老の傳へを記す

を一後十句 慶安三年吟ト云

終の目とゆらく作らぬ詮もる

悪魔いまどとつゝめる門

此句を事のことあるならざれと終の目を鬼のおそるといふ諺のありし証小録

用捨箱 上十三

萬世節用集廣益大成 宝永三年印本 小載る○年中行事月並世話

二月八日所事といふ支 極月八日門戸小終をつら 字彙 事ノ業也ト云

二月あひなとりめ十二月所事なり田家あてると事なり古流日記注ト云即

己心也精進をまるといふる春ハ農事のとめ冬ハとるれば祀養るり八日ち

彼岸の中るればましく此日を用ひまると事なり戸口小終をつら終の目といふ方相

の目おるぞり邪氣をたらふ事なり○金葉 逸りの今ハかこの目とありしゆりて

なれん名こそとてなれ。方相ハ邪氣のおそる物るれば其面をかけて儼のこさ

追まらふ事なり或説ハ終とつる事ハ九字の形なり終似

る九字と臨兵闘者皆列前行の九字ハ道家の秘呪なり

今ハ佛家も用るる。居家必用也ト云縦横之秘法

門 門内ニ立テテレヲ呪スト云云九字ト 从上月並世話見由 同心也カゴヲツル事ハ縦横ノカタチ也 画もまき模不ある事









紙教僅小八葉丸ふろしりるハ草紙の奥書あり

甲捨箱 上十六

右は中世より流布有教多殊之にあやまり  
 ありて友とて 奥門をたのむ けぬ之く あはれに 世傳之に  
 丹一 致本年た 字之 致本年た 板新之也

世ノ二月と旬

正本屋十右衛門板

○世の二月と旬の延宝元年秋未考

是より前是れ是等是れの草紙教種あり。事此奥書不見をり。あれは以當時  
 の流行ありひやるべし。何中もあれ六方と標題をつけ。草紙のりをもて人の  
 多くをうけかたきのみ小津大路をゆき商人を集め。ゆきとる六法と名  
 つけ。画本あり。それぞふり。きよ遊女あり。似氣あり。彼六方洞也  
 巴まねくが名をるの洞也をよ記ある。吉原六方と題し。るありて彼らとる六  
 方と草紙の附よもよく似たり。是又一葉づきく摸くゆく也

此のころより六方の登亭仙果尾州熱田宛るり可惜梓彫の年号欠れざる延宝年  
 間の物と見ゆ第一小海鬚鬚賣をを出し初春のうを来りし由あるべし  
 文化の頃は江戸の商人絶る秋今のさそ下余楮の唯ふおんより上は見えし  
 貝の辨実うを分るるをりてそのころの海苔の事を二ツのべし○葛西海苔毛吹草 諸國名産下總の条に  
 「葛西海苔。是を浅草海苔といふ」とある誤りながら昔西のをこれとやく

いとあみむらう

こころや加藤にばんばんいよはんぞかどのい  
 せの成りあもかごめけしどかよそうい  
 のあすはそふはるいりありとらんぞうあも  
 るいりありあもいりあもあもらんぶひど  
 さのいせのりそどののりそこのりありあも  
 さこのりそひとつるあもすこりあも  
 こころあもあもこのりあもあもあもあも  
 らのりあもあもあもあもあもあもあも  
 あもあもあもあもあもあもあもあも

寛永正保の頃よりありし証とい  
 へし昔の葛西海苔の浅草  
 のよ似る物なりとぞ故の六方宛  
 小つるれとらん秋今もよく小  
 ありのり異なるり  
 能譜玉の相蝶々手撰 延宝四年印本  
 行徳や汐とちられは  
 葛西のぞ 破扇

用捨箱 上十七



續江戸砂子享保元年印本の「葛西海  
 苔。葛飾郡。粟川舟堀。二江。  
 今井。これ等の所産なり其所  
 あり製を名産する浅草海苔  
 小似て異なるり」と見え又「葛飾記  
 寛延二年利根川云云茶の「近年  
 なる鮫魚出末葛西海苔近  
 年あり」とあるを考ふるべ

此海苔の絶るは寛保二年あるべし  
 の料理物語の海苔も。品川海苔の事ハのせむとあるは寛文年間寛文元年の撰「俳松」の  
 色と品川のや春の海」といふ兼豊が向あるのころ  
 森の海造りたる浅草を製するころの海苔ハ則ち新の海苔なり」とあると思ふ  
 昔ハ生海苔と品川のやといふ秋今ハ浅草海苔の赤と帯ると品川海苔といふ

男一木芽漬元禄十六年印本「物の名も新ふよりてかたりたり品川海苔伊豆の磯解」といふ狂歌を載り伊豆の磯六方綱伊豆の磯の名著あり伊豆園伊豆の磯の今もあつた飲不飲不知

原六方

是ささけしやうりつとさうりや  
 であつたはれ作馬をありてあり  
 かうさばうをわひふさうりつとさうり  
 うちこあ乃さうりつとさうりせぢり  
 けぬれりぬれりけりつとさうりつと  
 せぢりぬれりぬれりつとさうりつと  
 つとさうりつとさうりつとさうりつと  
 のさうりつとさうりつとさうりつと

むのりけのむりつとさうりつと  
 まうりつとさうりつとさうりつと

用捨箱 上十八

○上小摸しる吉原六方  
 板木今小傳りてありとあり  
 按さるふあふうりつと六方綱  
 三種のうちさうりつと草紙吉原  
 寛文八年印本吉原小摸の  
 跋小尻もむきをぬるさうりつと  
 小れをつり又と吉原六方小摸  
 さうりつとさうりつと袖かこさうりつと  
 とありは文うりつとさうりつと袖鑑  
 是より前の刊行りつとこれ吉原

かのりつとさうりつとさうりつと  
 さうりつとさうりつとさうりつと  
 つとさうりつとさうりつとさうりつと  
 さうりつとさうりつとさうりつと  
 さうりつとさうりつとさうりつと



六方も寛文八年より前の彫刻  
 ありつと今に至りて百七十余年  
 板木の傳りつと奇とありつと  
 序と巻尾平葉を摸さ  
 新町九巻湯とありつと亀甲至り  
 或ハ甲を紅小作る  
 序の末小年号及作者の名も  
 ありつとあるべけれど闕り  
 巻尾小如正本屋とあり名はて  
 門の字の存かざる六方綱と同  
 正本屋十巻の板



○あふりし六方組の板元

十右衛門が目せ世棚の圖を

室へ則ち繪草紙賣り

江戸の世男蝶々子撰延喜年印本

るや鷹竹よなきは四方の春 渡山

曆又繪さしの類を此ぞ竹よなき

賣ゆりか昔風俗へ本海道の兩々之道中附の

冊子と割る竹よなきを軒へ掛かへ

此余風をもひ

天和年間之  
四巻塚町圖

用捨箱 上十九



繪草紙の標

赤黄茶色の

たるま

色なれり



十二 春秋之繪櫃

壁言万葉集の事... 考證の著述者の誤り... 書を得ると不得との幸不幸ありて... 節の風俗と田舎人不知らせんとの作るれが... 是より六六縁故を解するも... 俳諧五節句

俳諧五節句

貞享五年卯本改元元禄元年也 尚舟主人翁書類本未見

三月三日云一「桃の繪櫃」柳 本地の櫃は桃柳を繪かく櫃の内は草の餅赤飯も入る所臺匙との物縁是れ繪する... 是五器より本地の挽物不繪

用繪箱上二下

あり。土佐日記の二月十六日今日よりさらか... 小櫃の繪もまじりのかやぢのうごもか... あり。是節句は賣繪櫃なり

繪櫃圖



繪物師の細工より本地の 桃柳を画くを中も中も 繪あり

おつ不 大小あり 本地の 挽物 あり

縮たる繪櫃ふとさる柳う那 頃世 嫂もまけ繪櫃よかへる古柳 今 「以上五節句不 此草紙など繪櫃の事とせりく記...」

砂金袋

明曆三年刻 西武撰

衣服をも遠りちひ櫃の内 翁舟 衣櫃ふそりりてはあり

細少石

寛文八年刻  
梅盛撰

餅とるすく草小花見繪櫃多 離雲

今様姿

寛文十二年刻  
惟舟撰

若草の餘もとれる繪櫃うな 金貞

塵取

延宝七年印本  
常矩撰

柳とまきさくさくさく決の句の伏見の花の推り

上巳

櫃のひくろく日小兒うるや柳の陰 如雲

ええさりや櫃ふさ子伏見の花 宗雅

緑青の松も声や繪櫃賣 如葉

松と馬さ  
うもり

空林風葉

天和三年印本  
自悦撰

まめの糸や嵐を埋む繪櫃の松 知連

櫃賣もるす節句やをた道や敏 可久

用捨箱 上六一

繪櫃うり  
辺き物も  
ええさり書  
時よりや  
あり

是のころほど繪櫃の句い多くあれども考証し便るきの比皆略つ

五節句 九月九日云 菊の繪櫃 櫃の形三月節句不同其繪小栗

をかくるり内小栗も赤飯ものころり所臺匙かつ不ありと記一形の  
かろろざる故るべし圖を不載又菓の繪櫃の句種々

隠葉

延宝五年印本  
似船撰

九月九日 柴栗小栗の花咲繪櫃うな 但安

雑中

延宝九年印本  
常矩撰

櫃の鶴栗の林ふゆそふなり 笑種

櫃の蓋栗のきせ綿るるべしや一味

くみや櫃あきあけよかける白菊の如葉

又土佐日記附注

山崎の小櫃云云の注ふ或人の日女兒のりてあをひ物よ小櫃

小丹青にて繪をくく京都にて二月上巳九月九日ると小童のりて遊ぶる  
との事と見えたり此書万治四年の印本なり菊の繪櫃も當時既にあり  
やうふきとぬされ近製の繪櫃此春秋を混して桃と菊と画きたるを秋  
の雛ふつるべき料菊を添ぐきと思ふべし其故の菊の繪櫃をぬる  
秋の雛の近き事るれば若菊の繪櫃あるはひうれて秋の雛の起るも知  
べし正徳三年印本入子枕本二季の雛 因小曰小窓雜誌 宝曆三年 芝神明社中  
賣小櫃を社人の十木筥との原雛の具る故小原の花を画けり一年上方  
より下せし船遅くして雛の節を過ぎて着船せし故に市小賣の例と  
りたり右小櫃を京大坂にておの櫃との孫生と重陽と小賣京師  
ゆゑ重陽も雛遊びする故也土佐日記云云との事あり繪櫃小桃  
柳。松。鶴の茶ふゆりてを画きし事いふと紙雛の模様あれば

用捨箱 上廿二

由縁るまもあつむ此十木筥の説種々ありたりや何やとん人の  
心ふまうせぬ。又云おのの誰か知る如く中昔よりの女河を版の事  
るりおの匙の拘子おの櫃の版櫃あり大坂獨吟集 延宝三年 附合の句  
「見こまけ花よ紅葉よおの櫃 鶴永」是も繪櫃の句歟小窓  
雜誌と合せ見ぬべし  
再云 順世が引く土佐日記の文を考ふる小貫之ぬし任園のうち幼き  
女をじるひあへり宇治拾遺物語 七ツやのむらとわり 其歎き此茶ふとらへ見えたり。さてまがりの  
菓子やうの物。小櫃はもほそびるれば土佐へくづりあふき彼とさるきがりとめ  
る事と思ひのぞられ菓子のかも小櫃の繪もそのまふかたねとそその女の  
亡人とりたる我のうちの賣人の知れどとのをれりるべしコト あつらうさる  
土佐日記の注譯めきてとこがまうれば若考の如くまふ九百年の古より

ありー童の玩弄具なりとの証もあるべき歎と虫のせとあきつ

十三 捨てあるとの小歌

元禄宝永の頃吉原を捨てあるとの小歌の流行せしあり歌の語  
勢を捨てあるとのひが故とてん節と名づけしとを **福德男** 宝永三  
年印本  
小 嘘ばさく程声やさしく。さん谷をよ下ぬのるの子がまててんあると  
うふ **又** 夕貞利生草 宝永元 年印本 吉原揚屋の事とひ条 **又** 二味線のこと  
の心も勇らん 頻廻りの歌の柏屋の六がまててん節をうへいたつて棄しと  
るとの事あり **又** **蕉尾琴** 元禄十 四年刻 小

おのれめや捨てあるを雪の病 其角

此句 **五元集** あり「まてあるとの小歌を句の題めて」と前書とあきつ  
其角も後世の嘘えま、と思ひてるべし

用捨箱 上 廿三

十四 米饅頭の名義

米饅頭のかよとの女の製しとあり故の名なり。又常の饅頭の小麦の  
粉をこつる是の米を製されば如け名づけしるべしとのるが先達の説  
る予又癡論あり中昔の俗語に遊女をよとのとひよの饅頭と女郎  
饅頭との義ありありとむや其故の野郎餅とあり **人倫訓蒙圖彙**  
元禄三 年印本 餅師大佛前住しと云 **佐々餅** 野良餅 野良餅等品々  
見え同頃のかぶきの画本 **傳受狂言** の詞に「饅もゆるくこざりまを  
お好るくやらう饅もこざります」 **又** **初音草咄大鑑** 元禄十 年印本 「さる所のゆらや  
野良餅とのゆらん饅を仕出しけれがめつらしき名とりてんやー大だん  
賣る **又** **木芽漬** 元禄十 六年刻 「腹中もさびきふあつとをそれの饅屋あり是何  
饅とよれが看板のりありあき四条川原の野良饅是とめされし」と

ありて画中の中もやらう 藤阿ん縁。大坂屋と出—暖炉あり

○又禿焼ふろやき 艶虚金僧年号元禄末 或室永初ノ刻 序小「焼が焙る餅をも禿焼とりんバ

婀娜く」との小事なえんり 禿焼の今もあり禿焼の形あるの後の製る冬 さて思ふふ子饅頭といひて

當時と女郎饅頭とゆえん 由多野良縁禿焼をそれ小対して名

づり—るべ— **五々津余情男** 元禄十五 年印本 吉原の事をいふ条小「米饅頭すう

と買ききふ—とあり遊女を總阿けふ—事とて女郎まん

ぢうふあうされ此文きこえがさ飲茶中も記さ如く野良禿焼女郎。對

の名るらんとゆえん 辯論 筆のついで米饅頭のあつくんえん事と

いへ—寛文中江戸のんた物とゆえり—短歩小見えん— さき小

著—還魂紙料けんこんの条より同頂の刻本 **酒餅論** 小「光る

源氏のもん—のんのある大将を我りちぢうせのろう阿け。かきおは—

用捨箱 上 廿四

と待あふ。金沙山きんささんの阿ねども。りぢうひり—米饅頭—るど阿まが

寛文中より名をかりしるべ—。又。 **國町の沙汰** 延宝三 年写本 木挽町山村座の

かおきの事をいふ条小「棧たかもそと—小終日の慰とて提重ていじゆう其その龍

の色と小艶るる小塩しほのまんぢう 篠さや糍もち金沙山の千代ちよがせ—子饅頭

浅草。本の下のかこ—米」と並べたり千代と鶴屋の女の名飲又 **元**の

木阿之物語 延宝八 年印本「まのち山此山と金沙山とまうまう— **我**都われとて

かよふよの饅頭の根えりりぢうぢうりてあやうくせんとて腰けけ

らちやとらひてかくこそとそよめち

ろ—よるも又くへきとありひまや命るりけりよのまんぢう—

又吉原さんちや評判 **榎林頭巾** 延宝八 年 さん茶本草飲食の部小「平野屋

巴まゝ焼やきめ—。松番屋のくよ 米まんぢう。其屋ひやあうの のびうはん **是**ん





